

# 宮城野今昔物語

名掛丁東名会 梅津恵一

万葉集で一番多く歌われている植物はなにかと尋ねたら、驚いたことにハギが一番で 141 首、以下、梅が 118 首、松が 79 首の順だそう。ハギが咲き誇る宮城野は嵯峨野や武蔵野と並び称される歌枕の地として、平安時代の王朝歌人のあこがれの地であった。ところがその時代この地に群生したハギは、ミヤギノハギではなかった。これは後世の園芸品種だそう。咲いていたのはツクシハギだったらしいが、京都には宮城野のようなハギの群生地がなく、また宮城野のハギは赤みが濃くて、美しさが際立っていたのが人気の的となった。

その功労者となったのは平安時代に国司として多賀城に赴任してきた橘為仲（たちばなのためなか）であった。彼は任期を終えて京都に帰るときに、宮城野のハギを掘り起こして、長持 12 個に入れて持ち帰った。京都に到着した頃にちょうど満開となったので、そのうわさを聞き付けた人びとがハギの花を一目見ようと群がり、天皇もこっそり隠れて見物に訪れた。今日では考えられないような大評判だったと思われる。（鴨長明『無名抄』より）

ところが、都びとがあこがれた宮城野は、現在の私たちが宮城野原と呼んでいる地域よりもかなり広範囲の地域で、その一帯を漠然と宮城野と呼んでいたようだ。その宮城野も時代と共に大きく様変わりを遂げる歴史を歩んできた。

741 年に聖武天皇の命によりこの地に「国分寺」が建立されたが、869 年の貞観大地震と 934 年の落雷のために荒廃の一途をたどった。その後再興したのが奥州藤原氏であった。ところが 12 世紀後半に、源頼朝は義経をかくまった奥州藤原氏を亡ぼそうと挙兵した。その際に藤原泰衡が榴ヶ岡に陣を構えたために、宮城野原一帯は戦場となり再び荒廃した。しかし鎌倉時代から室町時代へと時が流れると、「国分寺」の前によろやく門前町が出来て、馬市が開かれるほどの賑わいを見せるようになった。

伊達政宗の時代になると、当初この地域は大町の検断職 只野小右衛門が拝領した。周辺の原野にはウズラやヒバリなどが多く生息していたため「生巢原（いけすばら）」と名付け特別の猟場と定め、永野家を野守に任命し管理させた。さらにこの門前町を国分町に移し、その代わりに只野家には毎年 12 月 25 日から 5 日間、芭蕉の辻を中心に「仲見世」と称する市を開く権利を与えた。また境内に「薬師堂」を建立し、同時に外敵の侵入を防御するために近隣に 20 余りの寺も造営して「連坊」と名付け、付随する道路は「連坊小路」と呼ばれた。とは言っても宮城野で賑わいを見せていたのはこの周辺だけで、他は見渡す限りの原野であった。松尾芭蕉は 1689 年 5 月、みちのくを巡る旅の途中で「薬師堂」を訪れた。ハギが花咲く季節ではなかったが「萩の花が咲き乱れる秋の宮城野の風景が偲ばれる」と『奥の細道』に書き残している。

明治時代になると連坊一帯の寺領は明治政府に撤収されて、多くの寺が退散して畑となり、「国分寺」の別当寺だけが残った。また北側の原野は第二師団の練兵場となった。ただこの広大な原野には、平安時代

のあこがれの地としての面影がまだ残っていた。

1896 年、西行や芭蕉を師と仰いでこの地を訪れた島崎藤村はその感動をつぎのように詩っている。

心の宿の宮城野よ  
乱れて熱き吾身には  
日影も薄く草枯れて  
荒れたる野こそうれしけれ



『若菜集』より「草枕」

太平洋戦争後、宮城野原の練兵場は宮城野原公園総合運動場として整備され、各種の競技場が建設された。1952 年には第七回国体が開催された。その後周辺は住宅地となり、魚市場や青果市場（のちに卸町に移転）もつくられて、旧国分寺境内には聖和学園と J R 貨物駅も出来た。連坊は戦前から、仙台一高や仙台二女高、連坊小学校等が開校していち早く文教地区となっていた。

さらにこの地域は仙台市の再開発事業が施工されて、様変わりに拍車がかかった。2004 年には東北楽天ゴールデンイーグルスがこの地の球場を本拠地としたことで、試合のある日は数万人の人出でにぎわっている。また仙台医療センターが移転後、その跡地には演劇やコンサートにも利用できる新たな県の文化施設の建設が計画されている。

かつては多くの文人たちが心を揺り動かしたハギの花の咲き乱れた宮城野は、今では全くその面影はなくなってしまうが、新たなスポーツや文化、芸術の拠点となって生まれ変わろうとしている。

【写真 梅津氏提供】



「かつて釈迦堂があった場所に建立された宮城野の道標」（現在は宮城県サポートセンター敷地内）

【参考文献】

- 『郷土史仙台耳ぶくろ』三原 良吉／著 S212 ミ 1982 年 宝文堂
- 『仙台あちらこちら』佐々 久／著 S291 サ 1982 年 宝文堂
- 『日本古典文学大系 65』918 ニ 1977 年 岩波書店
- 『若菜集』島崎 藤村／著 911.5 シ 2002 年 日本図書センター
- 『藤村詩集 新潮文庫』島崎 藤村／著 911.5 シ 2008 年 新潮社

